

滋賀県彦根市におけるMIMの取組

I 彦根市における教育環境・状況

1 彦根市における基礎情報（平成26年5月1日現在、人口を除く）

- (1) 人口 112,750人
- (2) 学校数 市立小学校 17校, 市立中学校 7校
- (3) 児童・生徒数 小学校 6,585名, 中学校 3,282名
- (4) 通級指導教室および特別支援学級の設置状況

① 小学校

通級指導教教室

発達障害	2校,	2教室,	38名
言語障害	1校,	1教室,	31名

特別支援学級

知的障害	17校,	19学級,	91名
肢体不自由	5校,	5学級,	7名
身体虚弱	2校,	2学級,	3名
病院内（病弱）	1校,	1学級,	不定（入退院者の数による）
弱視	2校,	2学級,	2名
難聴	5校,	5学級,	6名
自閉症・情緒障害	16校,	17学級,	62名

② 中学校

通級指導教教室

発達障害	1校,	1教室,	21名
------	-----	------	-----

特別支援学級

知的障害	7校,	7学級,	33名
身体虚弱	1校,	1学級,	1名
難聴	1校,	1学級,	1名
自閉症・情緒障害	7校,	8学級,	30名

- (5) 特別支援学校の設置状況：なし

2 彦根市における発達障害関連の施策

(1) 文部科学省の委託事業

① 「インクルーシブシステム構築事業」

実施期間：平成25年度～26年度

概要：

- ・障害のある児童が、学習意欲や集団への所属感をもち、障害のない児童とともに学ぶことができる教育活動の推進を図る。
- ・特別支援学級在籍児童および通常の学級に在籍する発達障害の可能

性が疑われる児童における個々の教育的ニーズに応えるため、対象となる児童の合理的配慮を検討し、それに基づく教育活動を展開するなかで、児童一人ひとりの自立に向けた指導の充実を図る。

<合理的配慮の充実に向けた学校の取組について>

- ・校内検討委員会の設置をする（校長・教頭・教務・研究主任・特別支援コーディネーター・学級担任・合理的配慮協力員）。
- ・年4回校内検討委員会を開催し、対象児童への合理的配慮の内容について検討する。
- ・特別支援教育にかかる学識経験者を講師として招聘し、ユニバーサルデザインの授業づくり、合理的配慮の観点に基づく指導計画について教員研修を開催し、教員の力量を高める。
- ・年間7回の研究授業において、対象とする児童の合理的配慮の内容を指導案に明記し、授業における児童の姿から合理的配慮の成果と課題について検証する。

<事例の対象となる児童生徒等に対する「合理的配慮」の提供に関する取組について>

- ・事例対象児童の合理的配慮の内容については、個別の教育支援計画および個別の指導計画を活用し、保護者と懇談の上、決定する。
- ・特に、「教育内容」、「教育方法」について配慮の内容を吟味し、決定した内容を個別の指導計画に組み入れる。
- ・合理的配慮によって対象児童がどのように変容したかを学級担任および合理的配慮協力員が記録し、その記録をもとに校内検討委員会で見直していくという PDCA サイクルに基づく評価をしていく。

②「発達障害早期発見早期支援事業」

実施期間：平成 26 年度～27 年度

概要：本報告で行う MIM の取組を参照。

3 彦根市における学力向上関連の施策

- (1) 文部科学省の委託事業：なし
- (2) 県の委託事業：なし
- (3) 市独自の事業

「彦根市学力向上推進事業」

実施期間：平成 25 年度～27 年度まで（終了時期は予定）

概要：

市内全小学校 5 年、6 年、中学 1 年、2 年を対象として NRT（標準学力検査）を実施。経年変化をみることで、1 年間の指導を振り返る。全国学力・学習状況調査を自校採点し、1 学期中に各校で結果を分析し、夏期休業中に学力向上策を作成する。教育委員会は各校長から向上策の聴き取り、教育委員会からの助言という形で懇談会を実施している。

また、退職教員を中心として地域の方々に学校に来ていただき、学力

補充講座を開設している。校区によってボランティアの数や実施日数に違いはあるものの、全ての学校で実施している。

彦根市内の 3 大学に呼びかけ、教職をめざす学生を中心に学校への支援を募集している。文部科学省が平成 16 年度まで実施していた学力向上フロンティア事業の一貫として行われていた「学生チューター」制度（滋賀大学と彦根市立西中学校で実施）を他の 2 大学にも広げ、学生チューターとして入れる学校を市内の全小中学校とした。今年度は 70 名程度の学生がチューター登録をし、20 校に入っている。放課後の学習だけではなく、別室対応児童生徒への学習支援、授業に入って TT を行う。学校の教育活動全般に関わって支援してもらっている。

4 発達障害のある子ども等への支援リリース

(1) 支援員や巡回相談等の人的支援

彦根市特別支援教育専門家チーム

概要：医師 1 名，臨床心理士 2 名，学識経験者 1 名，相談機関の担当者 2 名，通級指導教室担当者 4 名，特別支援学校相談担当教諭 5 名，教育委員会特別支援担当 1 名の 16 名で構成。学校・園からの要請に応じて専門分野の担当者を派遣している。保護者の相談ではなく，所属している学校・園からの要請で，組織としての指導法や対応，ケース会議への参加を中心的な支援としている。

(2) 教材等の提供といった物的支援

特記事項なし

(3) 公的な相談・指導機関

① 彦根市発達支援室

概要：平成 25 年度に開室。教職の職員，保健師，臨床心理士，事務職員で構成されている。主として保護者や本人個人からの相談に応じている。幼児期から児童期にかけての相談が多いが，就労後まで対応している。

② 通級指導教室

概要：城東小学校，城南小学校，南中学校の 3 校に発達障害を対象とする通級指導教室を設置。他に言語障害通級指導教室を平田小学校設置している。言葉の教室は，幼児を対象に主として言語障害の子どもに対して指導，相談を行っている。

II 彦根市におけるMIMの取組

1 MIMに取り組むことになった経緯

発想の原点は、学力問題である。全国学力・学習状況調査の結果を受けて、彦根の子どもたちの学力向上をどう図るかが、大きなテーマであった。テスト対策的なことも考えたが、もっと根本的な部分から学力について見直す必要があると考えるようになった。

そんな中、以前、彦根市立城南小学校でMIMの取組を行ったことがあり、読み書きに特化した指導に再び出会うことになった。

他市で取り組まれている資料をいただき、読み書きに苦手意識がなくなる、あるいは薄くなると、国語だけではなく、他の教科に対しても取り組む姿勢が変わるのではないかと考えた。

加えて、読み書きに困難を示す児童は、発達障害の可能性を疑う対象として、モニタリングすることで早期発見、早期対応（早期支援）できる手法として、MIMを入門期の児童を担う小学校1年生の担任全てに知って欲しいと考えた。

ちょうどその時期に募集のあった文部科学省の発達障害早期発見早期支援事業の趣旨にあった事業であったことから、全市的な取組とした。

2 MIMに関する実施計画

(1) MIM事業実施に関する構想（図1、2、表1）

- ① 発達障害の課題が見える前に指導を行う体制の構築
 - ・担任が児童の発達課題に合った指導方法を研修する。
 - ・担任が発達障害の可能性が疑われる児童の早期発見、早期支援できるよう専門性を高める。
 - ・平成26年度、27年度の2カ年で、市内小学校教員の約4割が発達に応じたアセスメントや指導方法を身につける。
 - ・実態把握のため、全国標準テスト（読書力診断テスト、CRT算数、MIM-PMテスト）を実施する。
- ② 学習面や行動面で何らかの困難を示す児童生徒を含むすべての児童生徒が理解しやすいよう配慮した授業等、指導方法の改善
 - ・特殊音節の指導において、視覚化や動作化を伴う方法で、多くの児童に理解しやすい指導を行う。たとえば、英語入門期の児童が外国語活動で行うチャンツ（リズムに合わせた単語や文章の発音練習）をイメージした指導で学習する。
- ③ 放課後補充指導等の学習面での配慮や、視覚的・聴覚的な刺激の軽減等の行動面での配慮による指導方法の工夫
 - ・MIM-PMテストの結果をもとに、教室内での配慮・支援で理解を進める児童（2ndステージ）と、取り出して支援をする児童（3rdステージ）を把握する。
 - ・特に3rdステージの児童は、休み時間や授業中のわずかな時間、放課後の時間帯、別室など静かな環境での指導の必要性が想定されるので、各校で可能な場面を設定し、指導方法や指導環境等の情報については学校間で情報共有を行う。

④ 適切な実態把握等による早期支援の実施

- ・読み書きに特化したゲームやワークシート等で国語の授業の始業時に繰り返し学習することで、早期につまづきを発見し、担任による配慮や支援を行ったり、放課後や休み時間の利用や通級指導による指導を行ったりして、早期の支援を図る。
- ・適切に実態把握をするために、前年度である平成 26 年 3 月に全国標準テストを実施し、同様の標準テストを平成 26 年度末（平成 27 年 3 月）に実施したものと比較し、平成 26 年度に行う指導について検証する。
- ・同様に、平成 27 年度の取り組み後、MIM による指導を 1 年生で受けた児童の 2 年生での学習状況や発達障害の顕在化等も検証する。

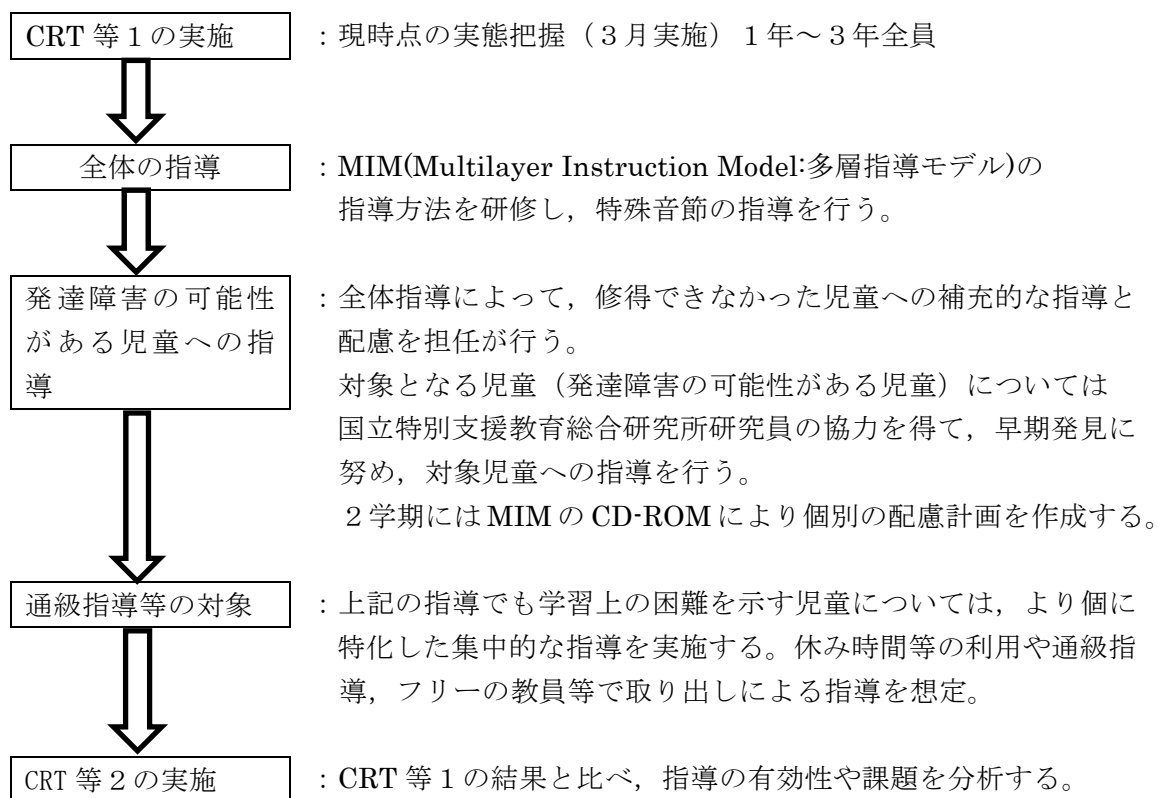


図 1 MIM 指導実施のイメージ

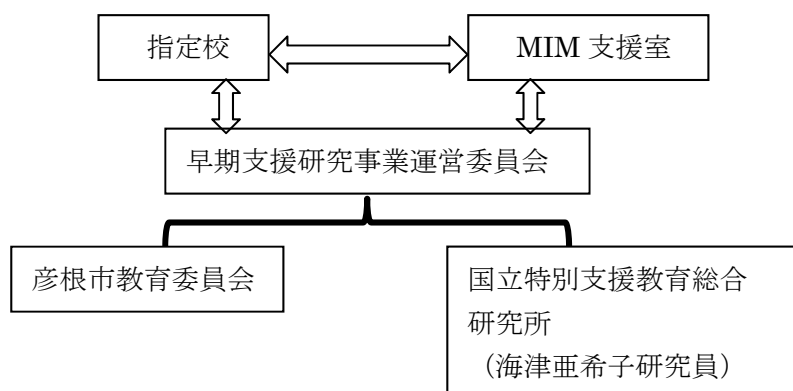


図2 MIM 事業推進のイメージ

表1 発達障害の可能性のある児童生徒に対する早期支援研究事業運営委員会

所属・職名	備考
国立特別支援教育総合研究所 主任研究員	教育学博士
教育委員会学校教育課長	
同 特別支援教育担当主査	特別支援学校教諭免許
MIM 支援室指導員	特別支援教育士
彦根市発達支援室 副主幹	特別支援学校教諭免許

※ MIM 支援室指導員として特別支援教育士（通級指導教室担任）を配置。MIM 支援室は指定校に置き、常に市教委と連携を取ることとする。MIM 支援室指導員の活動内容は、発達障害の可能性が疑われる児童への指導について早期支援研究事業運営委員会や担任への指導助言を行う。さらには、国立特別支援教育総合研究所とデータのやりとりや、指導内容の確認等連携を図ることで、指定校は指導法の確認や発達障害が疑われる児童の支援を行う。彦根市内の指定校以外の学校も、MIM 支援室と連絡を取り合う。また、指定校以外の学校では、MIM 支援室指導員の派遣についても依頼ができるようにする。

(2) 関係機関との連携

① 授業改善と早期発見に関して：

国立特別支援教育総合研究所から教職員への研修講師，指導助言を求める

② 発達障害の可能性が疑われる児童の日常的な指導や支援に関して：

彦根市福祉保健部発達支援室

彦根市特別支援教育専門家チーム

(3) 年間計画

年間計画を表2に示した。

表2 彦根市MIM事業の年間計画（2カ年）

	実施時期	実施内容	評価方法
1 年 次	平成26年4月	MIMの指導法研修	出席者アンケート
	平成26年8月	MIM指導実践交流	出席者アンケート
	平成26年10月	MIM研究授業	児童アンケート
	平成27年3月	CRT等実施 MIM評価検討会	各種データによる評価
2 年 次	平成27年4月	前年度結果検討 MIM指導研修	出席者アンケート
	平成27年6月	MIM研究授業	児童アンケート
	平成28年1, 2 月	CRT等標準テスト実施 中間発表	発表会出席者アンケート
	平成28年3月	2年間の分析, 検討	運営委員会による総合評価

3 MIMに関する事業における行政(教育委員会等)の具体的役割

- ① 研修の計画
- ② MIM支援室の運営
- ③ MIMに関する通信の発行(啓発活動)・・・MIM Press(資料参照)

4 MIMに関する研修

- ① MIMに関する平成26年度に実施した研修概要を表3に示した。

表3 MIMに関する研修概要

	時期	講師	対象	研修内容
1	5月2日	海津亜希子先生 (国立特別支援教育総合研究所・研究員)	管理職・担任等	概論と1stステージ指導の内容, MIM-PMの実施方法と解釈
2	8月5日	杉本陽子先生 (福岡県飯塚市立飯塚小学校・)教諭)	管理職・担任等	2ndステージ指導の内容, 講義・演習
3	12月26日	杉本陽子先生	管理職・担任等	3rdステージ指導の内容, 講義・演習
4	1月22日	片山真喜代先生 (滋賀県彦根市立城南小学校・)教諭)	特別支援教育コーディネーター	早期発見・早期対応と授業改善
5	2月20日	栗原光世先生 (東京都西東京	管理職・担任等	1stステージ指導の実施, 講義・演習

		市立谷戸小学校・教諭)		
--	--	-------------	--	--

注：対象には特別支援教育コーディネーターや1年生以外の学級担任も含まれる。

8月5日の研修には他市町、県外からの参加者もあった。

② 研修参加者の声

第1回

- ・MIMは言葉では聞いていたが、中身は全く知らなかった。今日の話聞いて、意外に簡単で面白く感じた。子どものためになるので、良いなと思った。(特別支援学級担任)
- ・20年近く前に低学年の担任をした際、特殊音節の指導を工夫した覚えがある。視覚化や動作化を通じた音節構造の指導は効果的だと実感できた。多層指導モデルを実践することで、2nd, 3rdの子どもたちに光をあてた具体的な指導ができ、長期的な学力向上に繋がると感じた。(特別支援教育コーディネーター)
- ・実際にアセスメントを行うことで子どもたちがどのような活動を行うのか、そこからどのような見取りをしなくてはならないのかがわかった。できていると思っていたも実はできていない子どもはいると思うので、MIMを行うことで、見落とししている子を助けられるようにしたい。(1年担任)
- ・興味深い研修だった。自校で実践することで、子どもたちのニーズに合った指導をしたいと思う。結果が数値化できることは、先生たちの指標になり、先生の意欲にも良い影響が出ると思う。(教頭)

第2回

- ・演習を交えた研修だったので、やり方やカード等の使い方がよく理解できた。2学期は私が1年生に出向いて行って担任と一緒に指導したい。2ndステージの子どもが1stステージにアップしてくれるのを楽しみにしている。(教頭)
- ・一学期でつまずいて困っている子どもたちの手立てがいくつもあり、2学期に取り組んでみようと思った。自分自身動作化に戸惑いがあり、子どもたちにも理解が進まなかったのが工夫してやっていきたい。(1年担任)
- ・1学期はあまりMIMを有効に使えなかったのが、2学期は学年全体で取り組んでいこうと思った。授業のちょっとした隙間の時間帯にも入れていこうと思った。6, 7月のデータがうまく使えていなかったのが、データを使って早期発見、早期対応に努めたい。(1年担任)
- ・大変わかりやすく、SSTも含めた内容だったので、楽しく、また、子どもの「できた感」が増してくると思う。理論はわかるが自分が具体的にできる。伝えることが大切だと改めて実感した。(特別支援教育コーディネーター)

第3回

- ・1st, 2ndと研修に参加し、1年生の担任に2学期は少しでも取り入れるように働きかけた。担任は努力した。しかし、個別の支援の取り出しの協力など、十分にはできていないのが現状である。今回テスト結果の見方や支援をすべきところを、個別の配慮計画のつまずきを示す■のチェックから見極めたりする方法がとてもよく

わかった。この研修に参加すると、子どもたちに「〇〇をしてあげたい」、「こんな方法をやってみたい」と意欲が持てる。子どもが楽しみながら参加できる取り出しの方法を考え、協力していきたいと思った。(教頭)

- ・動作・視覚など子どもの実態に応じてすることの大切さ、学校ぐるみで学校全員の理解を得て進めることの大切さ、短時間の積み重ねの大切さ、原因を突き止めて特にその部分を指導することの良さ、など多くのことを学んだ。(特別支援学級担任)
- ・毎月のMIMの結果から支援の必要性は理解できていても、時間がとれなかったりなかなか実際の支援にはつなげられていなかった。けれど、毎日の授業の中で短い時間で楽しくできるようなゲームなどを教えていただき、参考にしたい。(1年担任)
- ・夏の研修で教えてもらった内容を2学期に実践し、子どもたちも楽しみながら学習することができた。MIMを始めた頃から3rdの子は決まっていた、なかなか個別の時間をとれなかったのだが、3学期は学年で力を合わせ取り組んでいきたい。黄色(2ndステージ)、赤(3rdステージ)の子が白(1stステージ)になれるよう私も研究したい。(1年担任)

第4回

- ・なぜ、今この時期に1stステージの研修なのか？4月に担任が決まってから1年生の担任を対象に実施した方が効果があるのでは？と思った。しかし、実際に授業形式で具体的に教えていただけだったので、今まで知らなかった新しい指導方法や教材などを知ることができた。また、他学年、他教科の指導の中でも、MIMの視点を持ち、是非活かしていきたいと思った。(研修派遣教員)
- ・難しく考えず、○、□のカードがあるだけでいろいろな活用の仕方ができることがわかり安心した。動作化を身に付けることで、子どもも自分で自分の言葉の間違いに気づけるのでとても有効だと感じた。1年のまとめ、振り返りとして再度読み聞かせの学習にMIMを取り入れていきたい。(1年担任)
- ・言葉の支援としてとても有効な取り組みだと実感した。実際の指導の仕方を見せていただき、1、2年の担任に伝授したい。現在は1、2年の担任しか把握できていないので、今後職員研修として全体にも啓発していきたい。このような実践的な研修を増やしていただけたらと思う。(教頭)
- ・栗原先生の日々の実践で子どもの笑顔や元気な声がめ煮浮かぶようだった。指導は明確にリズムよく、ルールと特例を表や図で示すことが大切だと思った。先生が本音をおっしゃったところに共感した。MIMの良さはわかるが準備や補充の時間は本当にとれないのが実状である。教材整備は大切であるから、研修会で教材製作実習をお願いしたい。(特別支援教育コーディネーター)

5 MIMに関する事業についての現時点での成果

- (1) 学力向上の視点から導入し、毎月のMIM-PMテストの結果について管理職とともに共有し、改善点について話し合いを持つことができた。
- (2) (1)の件に関し、対象となる1年生のみならず、他学年にも考えを導入する学校がみられた。
- (3) 2ndステージや3rdステージ研修の後、授業内での配慮や支援について取り組む

学校が増えた。

- (4) 現在教育関係の諸機関の注目は学力向上に向けられていることもあり、研修会には管理職も一部ではあるが参加した。管理職が参加した学校では、MIM-PM テストの結果が良くなっていく傾向が見られ、参加した管理職も実感している。
- (5) 研修会へ管理職の参加も求めたことにより、2nd ステージ、3rd ステージの取組を全校体制で行う学校が幾つかあった。

6 MIM に関する事業についての現時点での課題

- (1) 新しいことをすることに対する抵抗感がある。平成 26 年度、約 10 ヶ月の取組を終えて、進捗状況に差がみられるのは当然のことと考えられるが、実施することそのものに否定的な学校や教員がいる。多くの学校で成果がみられ、全体としては順調にきたと思うので、次年度に取り組みたい。
- (2) どうしても「MIM＝特殊音節」というイメージがあるので、小学校 1 年生だけが取り組めば良いという雰囲気がある。一日も早く、他教科、他学年での指導例が普及することを願っている。

7 MIM に関する事業を進めるにあたって期待すること

福岡県飯塚市のように、市がコーディネーターを育てる雰囲気があって、飯塚市の担当指導主事も「今の課題は、第 2 の杉本陽子先生（飯塚市における MIM コーディネーターのような役割）を育てること」と話されていた。本市でも、授業研究等に MIM の観点で指導できる推進役の教諭、指導主事の出現が望まれるところである。

どの学年、どの授業であっても、授業改善や授業研究の場で、MIM の理論で指導講評するためには、6 の (2) で触れたように「MIM＝特殊音節」というイメージを取り除き、どの学年、どの教科にも MIM の理論（子どものニーズを頻繁にアセスメントしながら、それに合わせるべく多様化・多層化した指導を行うこと）を基に、授業を作るといふふうに事業を進めたい。

8 MIM への要望

- ・ MIM-PM テストの全国データの比較をするのに、3 年生、4 年生のも作っていたけると有り難い。
- ・ 他教科、他学年への波及。全国に呼びかけ、特殊音節以外の指導法を集め、データベース化して欲しい。
- ・ 彦根市で 1 年間取り組み、「子どもは理解しているのに、丁寧に書くから評価が低い」という担任の声を何度も聞いた。読み書きの流暢性を求めることが MIM の目的と理解しているので、子どもたちにスピードを意識させる指導について具体的に示して欲しい。

9 今後 MIM に関する事業を進めようとしている自治体へのアドバイス・メッセージ

- ・ 早い段階で研修を持つこと。実践する教員は極力研修を受けること。本市では参加できなかった者には研修会のビデオを送った。

- ・ 小学校の管理職および1年生の担任を中心に、不定期的にではあるが、教育委員会から MIM に関する通信を発行した。この通信が、「学習障害について」「実験研究の考え方について」「言語学習について」など、本事業に関わるベースとなるように努めた。
- ・ 彦根市の場合、以前に1校で MIM に取り組んだことはあるものの、ほぼ初めての状態であったので、全小学校長に対して個別に MIM の説明をした。しかし、一堂に会して説明会をしたほうが、無駄もなく、理解の凹凸も少なくなる。
- ・ 想像以上に消耗品を必要とする。彦根市では、文部科学省の事業を受けたことで対応できた。

* 資料

資料： 教育委員会が教師に向けて発行した MIM に関するニューズレター
MIM Press (全 17 号)

(文責：彦根市教育委員会事務局教育部学校教育課・主幹 山田 孝)